④　村田青麦『黄塵』抄（句集『黄塵』私家版、昭和四十八年）

召集令状受く鉄塊の灼けるそば

出征や空飛ぶ木の葉海へ急（せ）く

父母（ちちはは）の手紙も黴ぬ焼きて征く

馬斃れ氾濫の野に雷火立つ

洪水と戦禍の民に雷去らず

洪水の大河は敵の屍を流す

洪水や漂着敵屍戸に膨れ

氾濫の進軍馬の荷も泥に

眠りつつ歩くや寒夜雨の中

追撃を阻む夜河に雪熄まず

襲撃は雪降り覆ふ夜を泳ぐ

雪の河屍（かばね）かへさず水赭し

自爆の敵屍胸裂け襤褸の如く凍つ

寒夜伏し地雷踏まじと草を撫づ

　　左肩頭部骨折貫通銃創
砲火熄み鎖骨折られし肩凍る

　　中村五郎一等兵戦死
夜雲灼け弾片胸を刺しゐたり

腹部貫通炎天に血を流し死す

偽死の我と敵との間（あい）に灼く屍

炎天下息絶つ友の唇震ふ

息絶ちて炎天に屍となりしとき

右眼部手榴弾破片創兼
右眼銃創性網脈絡膜破裂
夏の露昨日右眼を失ひし

傷の眼の視力戻らず露白し

弾片蔵す眼底うづく汗の中

傷に蛆わきしと笑ひ逝きし兵

弾貫けし創痕広し汗の胸

戦終（いくさや）み勅使の如く揚羽来る

戦敗（いくさやぶ）れり今こそ稲を盗み刈る

法師蟬鳴け鳴け友の骨を抱く

雁渡る餓死の友を野に焼けば

寝藁凍て餓死の髪の伸びゐたる

洞庭湖赭し蛇捕る兵等ゐて

作者プロフィール　村田青麦（本名徹雄、大正二年〈一九一三〉～平成七年〈一九九五〉）伊勢市生れ。俳人。昭和十五年（一九四〇）応召して中国大陸へ陸軍兵として出征。昭和二十一年六月復員し、高浜虚子、橋本鶏二に師事して作句活動を展開。昭和三十六年「年輪賞」受賞、昭和四十四年「年輪年間作品賞」受賞。昭和二十二年夏から四日市羽津山に移居し、昭和四十八年に句集『黄塵』『放馬』を出版。青麦没後の平成十一年（一九九九）水沢町に、翌年には志氐神社外苑に青麦句碑がそれぞれ建立された。